

---

# 哀闇アーマー

眼が灰猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

哀闇アーマー

### 【Zコード】

Z0199Y

### 【作者名】

眼が灰猫

### 【あらすじ】

高校一年の夏休み。

俺は殺されかけた。

命の恩人の手により、なんとか一命を取り留めた。

命を救う対価で - - 体を捨てた。

俺を襲つた『オー』とは？

オーの住む世界とは？

想像を絶する世界に、俺は足を踏み入れていく…………

はじめまして。眼が灰猫と申します。

勢いで書き始め、そのまま投稿してしまいました。

小説を書くのは初めてですが、完結させるなどを目標に頑張ります。

冷たい田でもいいので、とりあえず見てやってください。

よろしくお願いします！

## 第一話（前書き）

はじめまして。眼が灰猫です。

数ある作品の中から、私の作品を目に留めていただき、誠にありがとうございます。

では、存分にがっかりしてください。

## 第一話

大変なことが起きた。

俺は今、目の前にいる見知らぬ人から死亡宣告をされた。

「お前はもう、死んでいる、と。」

いや、そんな世紀末なオーラは出ていなかつたし、何よりそれを言い放つた人は女性だつた。

ほたるびももこ  
螢火桃子　頭を左に傾けて赤い髪を揺らし、彼女は名乗つた。

体つきや雰囲気からの推測だが、俺より年上に見える。少なくとも高校生ではないだろう。

まあ、有り体に言つてしまえば、美人だつた。

……それはともかく、俺は当然のごとく目を逸らして逃げようした――が、ここが室内であることに気がつく。

それもまた、見知らぬ場所だつた。

どうやらアパートの一室らしいが。

とにかく状況を整理しようにも、整理のしようがない。

目が覚めたら、俺は知らない部屋について、謎の女性から意味不明なことを言われた。

これが事実で、これ以上でも以下でもないのだろう。

「…………」

萤火さんは相変わらず顔を左側に傾げ、視線はまっすぐに俺を捉えていた。

いい加減帰りたいなあ……。

すると突然、萤火さんは何か思いついたようで、

「あつ……見てくれば？」

「何をですか？」

「見てくれを、よ

今のは果たしてギャグだったのだろうか、と悶々としながら数歩で洗面所を見つけ、たどり着く。

「え……」

正直、あなたは幽霊になつて鏡に映りません的なオチが待つているのだと思っていた……まあ、そんな結末だったら、それはそれで困るが。

寝起きの思考は恐ろしい……。

さて、冒頭を『大変なことが起きた』で始めてしまった俺だが、

あれは取り消せりと思つ。

あの時点では別段大変なことなど起きていなかつたからだ。

そして改めて。

「大変なことが起きた。

はつきつと目が覚めてしまつた。

夢ならよかつたのに・・今更ながら思ひ。

何が起きたのかと言ひと、俺が鏡に映つていなかつた。

代わりに、髪は茶色・・いや、オレンジ色で、鋭い瞳は黄土色。総括して、チャラい・・そんな風貌の男が映つていて。

「……どうことですか」

こつゝの間にか背後にいた螢火さん、「訊く。

「難しいと思つけれど、頑張つて落ち着いて」

そんなことを言われるまでもなく、こんな状況のわりに・・どんな状況かわからないわりに・・俺には妙な落ち着きがあつた。

「あなたは、化け物・・私は『オー』と呼んでいるわ・・に襲われたの。

そしてあなたを見つけたときは、もう虫の息だった。

このままでは助からない。そう思つて私は、あなたの魂を抜いて、その体に入れたの。

方法は秘密よ - - といふか、私自身がよくわかつていなかから、説明しようと言われても困るわ

……は。

驚きを感じる神経が麻痺しているのか、俺は螢火さんの言葉をすんなり受け入れた。

前頭葉だの小脳だのがストライキでも起こしたのだろう。脳が働くのを止めた、とも言えた。

改めて、鏡に映る自分を見つめる。

どうやら特殊メイクでも、頭から爪先までの全身移植でもなさそうだった。むしろそつちの方が、まだ現実味があった。

生身。人肌。

正真正銘、人間のそれだった。

「そうね、今後のことだけれど - - 私は、あなたを元の体に戻す努力をするわ」

「……戻れるんですか？」

全く覚えてないけど、今までの会話の感じで、俺の体はもうボロボロのグチャグチャなんだとばかり思つていた。

「かうひじて生きているはずよ。魂がこうして生きてる限りは。  
最も、私があなたの魂を抜かなければ、どうなっていたかはわからぬいけれど」

「あつ、その・・その節は本当にありがとうございました」

身に覚えはないけれど。

厳密には、覚えている身がないけれど。

「見ず知らずの俺なんかを助けてくださつて……」

「ん？　あら、そんな風に聞こえつけられたかしら。

別にいいわよ、感謝なんてしなくて。それより・・

鏡越しに、螢火さんが目を伏せたのが見えた。

「・・私が困つたときは、助けてね」

いつもして俺の夏休みは、始まる。

\* \* \* \* \*

散歩でもしてくれば、と俺は螢火さんに半ば迫り出せられるような形で外に出た。

真夏だけあって、もう六時過ぎだといつのこ外で将棋ができるくらいに明るかつた。

名前は知らない、田舎町。

田の前に広がる、田んぼや畑。

……俺の前には、問題の山。

俺はこれからどうすればいいんだろう。元の生活に戻れるのか？この体は誰なんだ？ そして - - オニって、何？

脳内で迷子だ。

頭が痛いなあ。

比喩じゃなくて。

「 - - うつ」

地面が近い。

まさか、頭痛でしゃがみこむとは。

「大丈夫ですかキキ殿！」

声の主 - - クリーム色の髪が特徴的な十歳くらいの少女が、ポニーテールを揺らして駆け寄ってきた。

「キキ殿、立てますか」

キキ殿とは当然、俺のことだ。

いや、当然ではない。そんな風な呼ばれ方は初めてされたのだが、この少女は当たり前のようにつづ呼び方なのだ。

誰かと勘違いしてこられるのではなく、どうやら螢火さんが名付け親だと判明した。

由来は俺の名前である林を、『木』と『木』にして『キキ』 - だそうだ。

安直と詰つか、上手くもないし……つーん、微妙だ。

まあ、螢火さんにはかなりの恩があるわけだし、どう呼ばれようが文句は言えない。

「心配してくれてありがとうね。大丈夫。ちょっとフラッとしただけだから。

いろいろちゃんは優しいんだね」

何か気に障ることでも言つてしまつたか、いろいろちゃんは俺の言葉に顔をしかめた。

「キキ殿……いろいろの外見がこうだからって、そんな歌のお兄さんみたいな言葉遣いをしてもらわなくて結構です」

いろいろ。

萤火さんの『手伝い』をしているらしい・・オードである。

全ての事情を把握できたわけではないが、俺の日常を奪った主犯である「・・オード」。

一見して、一度見をしても、人との明確な違いがわからない。クーリーム色の髪が判断材料になるかと言えば、そんなことはない。染めた子だつているだらうし、その判断基準では、頭がオレンジの俺もオードに分類されてしまつ。

「とにかくで、いろいろちやんは、その・・オード、なんだよね？」

言つて氣分のいい言葉ではないだけに、ついつい歯切れが悪くなつてしまつ。

「はい。これらは、桃子殿の言つところの『オード』です」

「じゃあ……きみも俺を殺すの？」

「の？」

俺の聞いかけに、いろいろちやんはキヨトンとした。

そういえば萤火さんも同じように首を傾げていたけど、なんかこう、味わいが違うよなあ。

それにしても「え？」とか「ん？」とかのノリで、「の？」を使う人を初めて見た。

「いえいえ。ですか、いらっしゃる桃子殿のお手伝いをしてこらるのです。

せつかく桃子殿があなたを助けたのに、どうしてまた殺すのですか

「じゃあ何で俺は……」

殺されたのか……と聞こ終わるより早く、いろいろ詰めた。

「干渉したからですよ」

「干渉?」

「……」

「視認? 見ただけで殺されるのか?」

ヤンキーだつてそんな真似しないぞ。

「視認だけに、死人にされてしまうのです

「色んな意味で笑えない……」

なんだこの子。

「この辺つも桃子殿に説明をされてるはずなのですが……それでないのですね。

聞くなるかもせんし、ちよつと歩きまじゅうか

\* \* \* \* . . \* \* \* \*

「なるほどね」

今聞いた話を簡単にまとめるとい

「待つてください。キキ殿

「何?」

「 しづらへ流し読み推奨です。せりか、じゅんじゅかと流していく  
ださこ」

「一気にモチベーション削がれた……」

「ソリは纪念碑」と50ページくらい流すとかどうですか?.

そうですね、こうじとキキ殿が結ばれるあたりまで飛ばしてみま  
す?」

「お前がメインヒロインだったのか!-?」

嘘つけ。……嘘だよな?

「ただしイケメンに限る

「…………」

もつと話の流れを大切にしてくれ。

急流過ぎて俺まで置いてけぼりだ。

「 ただし川や海に流さないでください！ 自然を大切に！」

「まだやるの！？」

もういいだろ！

まあ、流し読み警告をするならば、もう少し早い段階でしておくべきだった気がしなくもない。

閑話休題。

普通、人はオニが見えない（反対にオニは人を見る事ができる）。

オニは、こことは違う世界に住んでいる。

人と関わることをしない。本来有り得ないが、もし俺のようにオニを見る人がいた場合、その人を殺すことで人間界とオニの世界との秩序を保つていてるとか。

「そして、オニ使いは互いに引かれ合つ。オニ使いにしかオニは見えない、と」

「それはキキ殿の妄想です。そもそもなんですかオニ使いつて！何パクつてるのですか」

「『い、いめんなさい』」

怒られてしまった……。

俺の前を歩く少女は、なぜかそういう面で厳しい。

「それと、オニとは簡単に言えば人の感情の塊……って、いまいちわからないんだけど」

たとえば、神を信仰し、神はいると思った心が具現化したもの。つまり、神そのものではない……と言われましても。

ちなみに、さつき接し方を注意されたので、呼称、子供扱いを若干ながら修正しておいた。

「そもそも元々、神とかって、信仰心こそが、それ自体が神じゃないの？」

宗教に疎い俺は、その段階から悩んでしまつ。

「さあ……いろいろ達は神や仏や妖怪変化をかたじつた存在に過ぎませんから。その疑問には答えられません。むしろキキ殿同様、考える側ですかね。」

いろいろ達は人より上位のものでもないのです。比べようもありません。違うのですから。

異世界人とみなした方がいいかもしません。いろいろ達の世界にしたつて、天国地獄より、異世界です。もっと言えば、超常現象、

魑魅魍魎共のテーマパークでしょうか」

違うのですから。

住む世界から、常識から、何から何まで - - 次元まで。

次元が違う。

俺は果たして、何の相手をしているのだろうか - - ふと我に返るのが、辛い。

気を取り直して、強く持ち直して、質問を続けた。

「そういえば、どうやって螢火さんと知り合ったの？ 普通は見えないんだろう？」

俺のように普通じゃない場合以外に、螢火さんといつりのよう『契約』（詳しくは知らない）したオーナーならば見ることができるらしい。

「桃子殿は……たしか知人の紹介ですね」

「じゃあ、その知人とは？」

「たしか、出会い系だったような」

「で？ どうやって？」

「スルーですかキキ殿……」

そりゃあスルーだろ。

「実は気合い系で、です」

「ど」「ソレ知らない……」

誤魔化すつてレベルじやないぞ。

「まあ、そこまで話したくないならいいけど。

あと気になつたんだけど、いろいろつて他人には見えないんだろ？  
……ことは他人から見ると俺は今、獨りで会話している痛い奴  
みたいになつちゃつてるのか。うわあ。……「うわあ」

「よいではないですか。昨今流行りの、エア友達つてことにしてお  
けば。万事解決なのです」

「それはそれで問題が生じる……」

万事休すだよ……。

「たしかに痛いのはその見た目だけで十分つて感じですよね」

傷ついた！　ざつくり刺さつた！

「で、でもこの体、俺のじやないし」

「そうでしたね。キキ殿の本体は、痛いならぬ遺体になつたのでし  
た」

「……螢さんは死んでないって言つてたもん

「冗談です。魂がなくては、それ以上死によつがありませんからね」

そういう理屈か。

たしかに、俺の体のままで生きられないなら、わざわざ体を替えた  
りしない。

……いや、滅茶苦茶だが、妙に納得させられてしまった。

「……それで、着きましたよ」

気が付くと小さな神社の前にいた。

話しながら、ずいぶん歩いたようだ。

「着いた、つて……ここがどうかしたのか？」

「……すみません」

「…………」

社の横にある、一メートル程度の垣。

「このが、向こうの世界に繋がっているのです。

キキ殿。少し離れていてください」

最初から近づいてなどいなかつたが、いろいろの言葉で、また少し

後ずさる。

「Iのへりでいいかな？……つー。」

自分の - - と聞いていいものか怪しことにひだが - - 田を疑つた。

「何、やつてんの？」

そう言つてみたものの、大方見当は付いている。

こりは見るからに儀式めいたことをしていた。

ほじなくして、ゲームとかでお馴染みの、まばゆい光を放つ魔法陣らしきものが出来上がった。

その中心で、こりは俺を向いた。

「やはり何事も縁つよつ縁れり、なのである」

「縁つたとも慣れたいとも言つてないけど……」

「行きましゅう - - オーの世界へ」

## 第一話（後書き）

よくぞここまでたどり着きました。さすとあなたの忍耐力強化に繋がったと思います。

これから展開が気にならんでもない、といつ方がいらっしゃいましたら、これからもよろしくお願ひします。

ちなみに、タイトルは『アイアンアーマー』と読みます。いい案があつたらいつでも替えたいです。

## 第一話

全身を包む光から解放されると、そこは - -  
「どう……？」

「ここは冥府めいふです。あちらといつを繋いでいる場所です」

見渡してみると、やけに狭い部屋だった。筒状で、部屋といつも  
リエベーターに近い。

「エレベーター！ 洗えますね。キキ殿

いりが隣で嬉しそうに笑うと、地面が動き出した - - それこそ、  
エレベーターのようだ。

じゅわ、この筒は下降しているようだ。

やがて動きが止まり、前が開けた - - 。

まず、空の色がおかしい。

なんてつたつて虹色だ。

それも雨の日にたまに見られる、水とガソリンを混ぜた、あんな  
感じの。なんだ淀んだ虹色だ。

さりに眼前には、市場を上品に仕立て、赤で塗りつぶしたような  
街並みが広がっていた。

何より一際目立つのは大きな城（城かな?）だ。

西洋風のそれは、例に洩れず赤く塗りたくられており、その頂上には金の獣の像が鯱しゃちほしよろしく、厳然と構えている。

.....。

ファンシーが過ぎるわ。

それは何も、建物や景色に限った話ではない。

そこを行き来する者達 - - オニだ。

そこにいる誰も彼もが異質だった。

人型や、いわゆる獣人みたいな出で立ちの者が多いが、中には本当にモンスターな奴までいた。

「どうしました？ 行きますよ」

俺がキヨロキヨロしている間に、いろいろは入国の手続きを済ませて歩き出していた。

「ああ。ごめん」

「んな所ではぐれでもしたら、迷子確定だ。

運よく迷子センター的な場所にたどり着けたとしても、その後、外見年齢十歳ちょっとの女の子に迎えに来てもらうという、惨め過

ざる光景と直面する」とになってしまつ。

……それは嫌だつ！

「夢、じゃないよな……」

「勿論です……」<sup>えいと</sup>は永都と言ひます。

そして中央、まっすぐに見えますのが煉府の本拠なのです

「煉府つて？」

「煉府とは、そちらの世界で言つて軍、いえ、ギルドですね」

「ギル……」

まあ、わかりやすかつたけれども。

「最近では民間の依頼を承ることの方が多いので、どちらかと言つて、やはりギルド寄りなのです」

どうやら街はナントカ都、施設がナントカ府、と区別があるみた  
いだ。

「『』明察です。それにしても田の付けどこりが違いますねキキ殿！  
まったく、どこに目が付いていられるのでしょうか。あっぱれで  
す」

後半、誉められてる感じがしない……。

\* \* .. \* \* . . \* .. \* .. \*

## 煉府本部。

近づいてみて、改めてその大きさに息を呑む。

……て言つたか、ここまで立派である必要はないだろう。まあ、反勢力でもいるなら別だが。

まあ、それはつまり煉府の力が大きいから、とも言えるわけだが、それにしたって、これは流石にやり過ぎではなかろうか。

おまけにセンスがないや、もう止めておこう。

「ではキキ殿。ここで一旦解散です。いろいろは少々、やるひとがあるので」

「何か依頼するの？」

「いいえ。ちよつと、です。

その間、色々見学でもしていくべきださー

「えつ、でも……まあ、いいか

では後ほど。と、いろいろは雑踏の中に紛れていった。

さて、どうするか。

金もないしな。適当に歩いて、適当にここに戻つて来よ。そもそも、俺は散歩の途中だつたわけだし。

いかに入り口までもが城に見合つて巨大だとはいえ、出入りの多いこの場所に、いつまでも立ち止まつているわけにもいかないし -

「何故ここにいる」

「... ... あ」

低く、濁つた声。

突然目の前に黒い物が降りてきた。

男の人 - - いや、オニだつた。

「... 、では、どうやつてこちへ來た」

急なことでの反応が遅れたが、どうやら俺に質問（尋問？）しているみたいだ。

周りの視線が集まる - - でも、なんで俺だけ？

まさか - - オニと入つて簡単に見分けられて - - 人がいるのは、規則に反する？

だとしたら迷子センタービルの騒ぎじゃない！

「ここでは田立つ。 ... 、来い」

……の割には、待遇が優しい。

とにかく、行ってみるしかないか。

中央の長いカウンター（煉府に何か頼む時に使うのだろう）の奥、四方が本棚に囲まれた書類ばかりの部屋へ通された。

例のオニは、机の上に散らばった紙をまとめながら、座ってくれ、と俺を促す。

その外見は、艶のある黒々とした髪。血色のよくない顔に、月を思わせる瞳。黄色いマスクのような物をしていた。

やつぱり人間との違いが明確にわからない。

確かに妙な格好ではあった。極めつけは、背中に生えた、髪と同色の翼だ。

ただ、それだけであって。

ただそれだけであって、それの他は——雰囲気や立ち振る舞いは——自分達と何ら変わりはなかった。

勿論それは、いろいろにも言えることだ。

何故だか、オニという言葉に差別的な響きを感じる。

まあ、そのオニに俺は殺されたらしいけど。

「最近、白鳥しらとりといつ男に会つたか

一通り整理を終えた男は、机を挟んで俺の正面の椅子に座つた。  
「？」と思つたら、この問い合わせである。

「？　会つていないと思ひます」

「……、さうか。いや、忘れてくれ。

名前を訊いてなかつたな。……、俺はサラクだ」「

「あ、僕は……キキです」

「つわ恥ずかしつ。

キキつて。キキつて何。

「キキ？　そうか。キキか

自分で名乗つておいてアレだが、できれば連呼しないで頂きたい。

「では、改めて訊く。別に咎めるつもりはないが・・・

どうやつて來た、と。

おそらくサラクさんは煉府の、それもかなり偉い人だ。

つまりこの建物内で、もつと言えばこの街の中で、信用できる人の上位にいることは間違いない・・・そう思つた。

まあ、そもそもオーネーを……偉ければ偉いほど……信じていいのか  
という、根本的な部分が解説されていないままだが。

「いろいろ……ある人に、連れて来てもらいました」

白状した。

「いろいろ? ……、なるほど。数奇なものだな」

よくわからないが、サラクさんはどこか納得したようだった。

「螢火と縁があるのか」

「螢火さんを」「存じなんですか」

「ああ。

……、今日行くのか

「どちらに、ですか?」

すると今度は、サラクさんが不思議がる番だつた。

「? 何か目的があつて来たのではないのか」

目的?

- - 何かある。

サラクさんが知つていて、俺が知らない - - 俺が知るべき何かが。

「何か、知つてるんですね」

「……、ああ。話してやりたいが、俺は今から出かけなければなら  
ない。……、だが、俺が話さなくとも、いずれ知るだらう」

「…………」お開きのようだ。

「……、これを持っていけ」

帰ひのうと椅子を立つた俺に、サラクさんが授けてくれた物は - -

「……鎖？」

であった。

「いつか役に立つだらう。それと - - 入つてきたらどうだ

サラクさんが扉を睨むと、なんと勢いよく開いたではないか！

「いや、ただ外から思い切り開けられただけだが。

「あ、お話し中だった？ スミマセンね

部屋に飛び込んできた女性は、サラクさんの部下……こまびらこ  
も見えない。

「……、ヤナギ。立ち聞きか」

短い髪が嘘のように、詐欺みたいに白い、俺と同年代くらいのこの人は、ヤナギといいうらしい。

「だから反省しますって。ホントに。それよりサラクさん…出たらしいつすよ、奴」

「わかった。……、ヤナギ。行つてくれ」

「冗談よしてくださいよ。アタシだけで？ 買い被り過ぎてません？ それとも、まだ怪我が治っていないんですか？」

「俺は急ぎの用ができた。それにお前一人でも十分だらつ」

「アハハッ。ま、そりゃあね。

あまのじやく  
天邪鬼持つて帰ればいいんですね？」

「ああ。では頼んだぞ」

そう言つて、サラクさんは俺の前に現れたときと回じよつに姿を消した。

「どうする？」

場外で一人のやり取りを眺めていた俺に、不意にヤナギさんが話しかけてきた。

「何がですか？」

俺の問いにヤナギさんは、遊びに行こうぜと誘う少年のような笑

みを浮かべた。

「……だからや、アタシと一緒に、天邪鬼捕まえに行ひやけりや。」

\* \* \* \* \*

じつじつになつた。

俺達は冥府を経由し、モリ葬土なる森に来た。

普通の森と違ひ点は、歩くと足が水浸しこな。

地面にあたる部分が浅い川で、そこから当然のように木々が生えていた。

わさびの栽培を見たことがあるだらうか。あんな感じだと思つてもらえばいい。

少し歩くと、高低差十メートル、直径一十メートルほどの瀧地が見えた。まるでクレーターである。

勿論、水は高い所から滝のように流れていだが、どうこうわけか、そのクレーターは水でいっぱいになることとななかつた。

「んじゃ、その辺で見てよ」

ヤナギさんはずつと、宙へ飛び降りていつた。

俺も続いて降りようとしたが、彼女以外にすでにステージにオーバーが見え、足を止めた。

軽く見積もってヤナギさんの三倍はある。

あれが - - 天邪鬼。

ヤナギさんは、どこからか黄金色の双剣を取り出し、両手に持つて走り出した。

「速いっ……！」

あつと言ひ間に敵の懷に潜り込み - - 斬り裂く！

だが意外にも、剣先がわずかに掠つただけであった。

一寸距離を置く。

すると今度は、天邪鬼は両手にそれぞれ弓を構え（凄い形の手だ……もはや、あれは手なのか？）、肝心の矢だが、いかにもファンタジーな異世界らしく、謎の光る物質で創られているようだった。

そして、俺のターンだと言わんばかりの猛攻撃を仕掛けてきた。

乱射だ。一見すると当たらずっぽうの数打ちや当たる戦法のようこ思えるのだが。

違う。

そのほとんどが、動き回るヤナギさんを捉えていた。

と並つても、ヤナギさんはノーダメージだ。彼女は彼女でそれらを剣で弾いていた。

矢に追尾性能は見られない。

なら、何故ここまでの命中率を誇る - - ?

「.....」

今思えば、ヤナギさんの一撃を避けた時も、どこか違和感があった。

見かけによらず、あれここまで身体能力を有するとは。

「 - - キキー」

「 - - うわっ - - 」

結果として、ヤナギさんの声は間に合わなかつた。彼女を貫くことに失敗した一閃が、俺の横に突き刺さり、地面を吹き飛ばしたのだ。

戦場に落ちていく俺。

ヤナギさんの邪魔はしたくないし、何より - - 何より俺がやられる - -

今日だけでそつそつ何度も死んでたまるかっ。

俺は心中で叫び、一心不乱に左手を・・鎖を天へ伸ばす。

すると・・

「！　届いたっ！」

まわかのまさか。鎖の先端は木まで届き、ぐるぐると巻かれ、俺は空中で止まった。

「アハハッ！　大丈夫そうだね」

とても、矢の雨をかいぐぐつている最中の人の台詞とは思えない、そんな呑気な言葉を掛けられた。

そればかりか、笑いながら俺の方を見やる余裕さえある。

「……いや、見なくていいから！　戦いに集中してくださいー！」

勿論俺にしても他人の心配ばかりしている暇もなく・・おそらくヤナギさんは心配いらない・・急いで鎖をよじ登る。

それにしても、よくも上手く木に巻きつけられたものだ。

何だろ？　サラクさんは、実は俺にこんな才能があることを知つていて、これを渡してくれたのだろうか。

いやいやいやいや。

突つ込み所が多いよ。

俺は鎖使いとかではないし、仮にやつだとしてもサラクさんがそれを知るはずがない。

俺は必死に鎖を投げたとは言つても、決して木まで届くような力ではなかつた。

そして何より、この鎖の長さなんて、せいぜい一メートルがいいところだ。

ところが、だ。

十メートルはあるうかという崖の後半、もう木より地面の方が近かつた、まで落ちていたところからのアクションだったにも関わらず。

それでも間に合つた。

地球上のあらゆるナント力学を、全て無視している。

……あつ、この地球じゃないのか？

結論が出た。

この鎖は凄い。

試しに狭い木々の間を通してみたり、遠くの葉を狙つてみたりした。

触手のように、手足のように、とにかくいまでも、手に取るよつに動かせる。

鎖使いのキキの誕生だつ。

……。

ヤナギさんは大丈夫だろうか。

見た感じは無傷だ。

しかし、だからと言って優勢かと言えばそうでもなく、天邪鬼の方も、ヤナギさんの先制攻撃以降も攻められている場面はあつたものの、致命傷になるほどの決定打は受けていないようだ。

長期戦になれば、彼女の体力が心配である。

そのヤナギさんが、

「……飽きた」

と、呴いた。

呴いて、空中に何やら輝く難解な図形を創つていいく。

いろいろが見せた、魔法陣的な物の仲間だろう。

対する天邪鬼も、山びこのように、真似して何かを空間に刻んでいく。

そう言えば、山びこも天邪鬼の一種なんだっけ。

「うわ！　まじか！」

天邪鬼の行動に、ヤナギさんは驚いて手を止めた。

そんなにまずい術を発動する気なのか？

ならば - -

俺の決断は早かつた。

左手の鎖を、有りつ丈の力で飛ばす。

鎖の伸びは留まることを知らず、元の十倍ほどの長さになつても、まだ天邪鬼へ伸びていく。

俺はいわゆる詠唱妨害を試みたのだ。

今まさに術を発動しようとしていた天邪鬼に、鎖は絡みつき、縛り上げた。

魔法陣は蜘蛛の子を散らしたように砕けた。

「ナイス！　キキ！」

儀式を終えたヤナギさんが、力を解き放つ。

突如天邪鬼を紫色の箱が覆い - - それは一気に圧縮された。

時間にして三秒ほどか。

呆気にとられて。

呆気なかつた。

間において、仕事を失つた俺の鎖が、水しづきを上げながら地に落ちていった。

「終了つ。緊張感のない戦闘描寫」苦労さま

「なな、何のことですかね？」

それより、そんな技があるなら早く使えばよかつたんじやないですか」「

「いやあ、試したかつたんだよね。天邪鬼って本来、人の心を読んで反対の悪戯をする、っていう下級のオニなんだーんで、その戦闘力が高いバージョンが、こいつ」

「こいつ、とはヤナギさんが手の中で転がしている、紫の立方体を指す。」

正しくは、その箱の中の天邪鬼のこと……だが。

「……正直もつとやれるとと思つたんだけどねー。ま、単純な肉弾戦じゃ、まだまだアタシもこんなもんなのかな」

だから……試したかつた、か。

……この人、俗に言つ戦闘厨……じゃない、戦闘狂？

「アタシって結構、『ハグーノム』でしょ~。」

「バーサークでしょーー?」

何言ひやつて人のこの人!-

よんで絶対言わないでくださいね!-

「……あの、そろそろ帰りたいです」

色々疲れました。

「まだいいじゃんか。もつと話がうつよ。

つーかヤナギさん、とか敬語とかしなくていいよ。見た感じ、年  
も近そうだし。・・・ま、見た感じが近いだけ、だけどね」

「じゃあ、うふ。よひこへ……ヤナギさん」

「さん付けは止めないんだね。

とつあえず葬土を出よつか

ヤナギさんは歩き出す。

「キキつヒトだり?

……そつなんだね。ああ、別に捕まえたりしないよ

その言葉に、何より安堵する。

「……ヒトとオーラの区別って、簡単にできるの？」

少なくとも、俺はできそうになー。

こりりを見たときだつて、クリーム色（普通はブロンドって言つのかな）の髪と、微かな、本当に微々たる違和感があつただけだし。

ヤナギさんの答えは、俺の予想と異なつた。

「オニー、か。オニーって呼ぶんだね。いいけどさ。

見分けられるかつて？　- - できないよ。

そもそも、ヒトと……あー、オニーの違いなんて、体があるかないか程度のもんだし。カタツムリかなメクジか、糞鼻糞、だよ」

表現がどんどん下品になつていいく……。

「……？　ああ、つまりヤナギ『さん』って呼び方は失礼だったの地位が高いんだよ。有名なんだよ」

「……？　ああ、つまりヤナギ『さん』って呼び方は失礼だったのか

さん付けじゃ、足りなかつたわけだ。

サラクさんへのあの態度も、単に礼儀知らずなわけではなく - - サラクさんが田上の者ではなかつただけだ。

ねやうへお等だったのだ。

「じゅあ、なむそり敬語じゅなせや黙田、じゅる……」

「ここつて。最近じや、みんな恭しくて肩が凝るんだよね。

だからこつて無禮なら、勿論ぶつかり飛ばすけどね」

理不眞だ……。

「あ、ヒートだと呟いた理由はまだナジヤないんだけんな。

わゆやうの廻府だけビ、永都までここんでしょ?」

「うそ

……こいつ、怒つてないといこなビ。

## 第一二話（後書き）

長旅お疲れ様でした。

次話は11月9日投稿予定です。

## 第三話

「キキ殿！ 心配しましたよー。ビルで行ったのですか？」

「ああ、ちょっとね」

アナギさんと永都の冥府で別れ（ややこしい部分があるかも）しないので注釈を添えさせてもらつと、冥府とは各地に複数存在する機関で、この世界と人間界の行き来以外に、冥府から別の冥府へ移動もできるのだ。ようするにテレビ（レポート）、俺はいろいろと会流した。

「では、帰りましょーか」

案外このまま、この世界で暮らすことになつても不思議はないと危惧していたが、あつさつ帰れるようだ。

まあ、戻ったところで、このアカヒー感に変化はないんだろうが。

「ビル行くの？ 帰らないのか？」

冥府は逆だぞ。

「キキ殿が心配過ぎて迷子センターでアナウンスをしてもらつたので、いましたよと報告を」

「本当にあったのか、迷子センター……」

\* \* \* \* \*

疲れた。

意識が混濁して、足取りも泥沼の中を進んでこるよし、重い。

こうりいわく、ヒトがあの世界から受けける影響は大きいのです。何せ、精神世界ですから - - 何のこいつぢや。

辺りはすでに暗い。田舎なもんで、ろくな街灯もない。

田舎すば例のアパート。

名前は……なんだつけ？

そんな感じで、それでもなんとか帰還す - -

\* \* \* \* \* \* \*

あれ、ここは - - ああ、そうか。

ひょっとすると、昨日のてんやわんやは夢オチではないかといふ淡い期待を胸に、洗面所へ向かうと、

「おはようございます。ヰキ殿

鏡を見るまでもなく、ポーテール少女の存在で、俺は肩を落とした。

「夢じゃなかつた……」

まあ、ここにいる時点で、わからそつなものだが。

「の……人の顔を見て落胆するとは、ずいぶんな挨拶ですね」

類を懲らませてゐる少女に謝罪と挨拶を済ませ、俺は訊いてみた。

「昨日、俺はちやんと帰つて来られたのか」

「ちやんと、とは言い難いですね。玄関で倒れてしまわれたので」

あー、寝オチか。

「どうりで記憶が曖昧なわけだ。いろいろじやないと思ひけど、運んでくれてありがとう」

とりあえずシャワーでも浴びたいなんて思ったのだが、第一この部屋にシャワーがあるのか不安だ。

探検してみよう、と意気込んでみたものの、ものの数十秒で幕を開じた。理由は簡単。狭いからだ。

部屋は六畳の、ここのみ。窓もひとつ。キッチンがあった。洋式のトイレもあった。シャワーまであった！

しづらへじこに住む羽田になるだらうと覚悟していたが、案外悪くない氣もしてきた。住めば都、は大袈裟か。

一回いぶりには席を外してもらつて、シャワーを堪能する。

「J一寧に着替えまで用意してあつたが、誰の趣味なのだろうか。

いや、ファッショ nに無知で無頓着の俺に付けられるケチなんぞないが、これは今の俺に悪い意味で似合い過ぎている……。俺だったら、この人と絶対目を合わせないだろうな、といつ意味でだ。目が合つたら何をされるか、わかつたもんじやない。

最悪、殺されるかもしね。

……そんな笑えない冗談はさておいて。

何をしようつか。まずは螢火さんほたるこに挨拶して来るとして、それからだ。

勉強でもするか。いろいろと遊ぶか。ただ、できる」となら何か螢火さんの手伝いがしたい。

それと、多少は例の世界が気になつたりする・・仮になるだけだ。あまり関わるべきではないのだろう。なら、わざわざ自分から首を突っ込んでやる必要もない。

現時刻を確認するため、久しぶりに携帯を開いた。

七月三十一日。木曜日。午前九時二十一分。

新着メールが一件。新着といつても来たのは一昨日、二十九日の午後六時頃だった。

妹 - - 陽奈からだ。

件名は『証拠写真』で、『ほら、黒いでしょう』といつ本文とともに、俺の写真が添付されていた。

どうだ、わけがわからないだろう。

俺もわからない。

黒いでしょう - - 確かに、髪は黒いし現在ほど長くない。勿論、目  
も黒い。

「どうやら、帰りの遅い兄を心配してのメールだったらしい」の一文で流すつもりだったのが、なんだこれは。暗号か？ ダイーン  
グメツセージなのか！？ ……だが残念、死んだのは兄の方だ（泣）

そういうしている内に、充電が残りひとつになってしまった。

やる」とは決まった。

充電器を買いに行こう。

\* \* \* \* \*

「やあやあ、おはよう。田が覚めたんだね。ん？ どうしたんだい  
？ まるで初対面の人に対する突然話しかけられたみたいな顔して - - あ、「じめん」「じめん。きみと僕は、今初めて会った - -

俺は『一一〇一』と書かれた扉、つまりはこの部屋の玄関を全力で閉めた。

それはもう、このアパートの寿命を幾年か縮めてしまったと言つても過言ではないほどに。住民の皆さん、ごめんなさい。

部屋の前に怪しい男がいる……。

曇つて見えにくいでアスコープを覗くと……やっぱりいる。

……まずは誤解を解こう。

「あの、すみません。部屋間違えてませんか?」

「ん? きみは林陽生くんじゃないのかい? - - 何で知っているんだって顔だね。

僕は白鳥。ここ、『淵森荘』の管理人やつです。きみのことは萤火ちゃんから聞いてるよ。

昨日はじめんよ、挨拶できなくて。ちょっとばかし急用があつて

やれ

『管理人』『萤火さんの知り合』のワードに、俺は少し警戒を緩める。

「いらっしゃすみません。話されてた最中に、ドア閉めちゃつて

『いいつて。よくあることや』

「よくないですよ」

「おお？ 頻度の『よく』と善悪の『よく』を掛けたんだね？ はつは。上手いねえ」

「いえ、そんなつもりは

……誰か助けて！ いろいろ！ いろいろしゃあん！

申し訳なさやその他諸々の感情によって、田が合わせられない。

というか、合わせる田が見当たらなかつた。

それは、白鳥さんの黒髪が、顔の八割を覆つていてるせいである。

ちなみに年齢は二十代後半くらいが妥当か。

「……大変だつたね」

「はい？」

優しい口調だった。

「螢火ちゃんの話じや、確かに青い大きなオ一にやられたんだっけ

「……何の話ですか？」

「誤魔化さなくていいよ。きみのことなら螢火ちゃんに聞いたって言つただろう。 - - そういえば、オ一は誤魔と呼ばれることもある

んだっけ

……この人何者？

「そんな大した者じやないよ。友人が向こう側に住んでるってだけで」

「……サラクさん、ですか」

「そうそう」

オニつて意外と友好関係あるんだな……俺、やられる必要なかつたんじやないか？

「誤魔化してるわけじゃないんですけど……青い、オニ？」

……あ、僕はそれに

殺されたのか。

そう言わると、そんな気がしなくもない。

「覚えてないのかい？……でも案外、そっちの方がよかつたかもしないね……自分の死ぬ瞬間なんて、記憶してない方が、さ」

「そうですね。運が……僕は運が、よかつたのかもしれないです」

「運が？」

白鳥さんの唯一の見える肌——口元が心底嬉しそうに笑った。

「運が、ね。

「うべきだよね」「ああ。運がよかつたねえ。さういふだよ。」いつだつて、そう思

……随分もつたいぶつた言い方が好きな人らしい。

「……で、陽生くんは昔はどんな陽生くんだったの？」

「どんな、つて……あ、写真ありますよ」

ちょうど陽奈から送られてきたアレが。

それに俺は、このメールの意図にも気付いた。

「いい笑顔だ。でも、こんな写真がポンと出でてくるつてことは、陽生くんは意外とナルシスト？」

「違いますよ。妹が『カラコンしてるの？ 眼の色が変だよ』って言つんで、じゃあ証拠はと訊いたら、これを持ってきたんです」

奇しくも遺影のようになつてしまつたが、ホント、イエイとかしてゐる写真じゃなくてよかつた。

まあ、俺のそんなテンションの写真は、この世に一枚たりとも存在しないだろうが。

「妹さん、元気かい？」

「え、ええ。恐らく

「……今頃心配してんだろうな」

「どうですかね」

心配してゐかなあ・・してゐんだらうなあ。

「だけど緊張のじないよ・・さみは友達の家に泊まつてゐる」と云つてゐるから。体も、しつかり保管してある・・」

「まあ

笑つてしまつた。

「何だい?」

「僕、家に泊めてくれるような友達いませんので、嘘つこさやつたなあと思つて」

思つて、自嘲的に・・笑つてしまつた。

「嘘じやないだろ? さみは今、現に僕の家に泊まつてゐるじゃないか

田嶋さんば、本氣とも冗談とも、慰めとも付かない、そんなことを言つた。

「・・おつひと。僕はきみを朝食に誘おつと連つて来たんだつた」

そういうえば、じぱらぐ何も食べていなかつた。確か、最後に食べたのは……一昨日の昼？

断るわけがなかつた。

\* \* .. \* \* . . \* \* .. \* \*

俺は激しく咳き込んでいた。

さつき食べた物とか、肺とかが飛び出しても、おかしくないくらいい。

「キキ殿！」

毎度いろいろには心配をかけてしまつ。

「この子はこの子で、毎回しつかりと焦つてくれる。……いや、迷惑をかけているのは百も承知だが、それにしても赤の他人が……昨日今日知り合つたばかりの関係なのに、こうして心配してくれるのは、どこかモヤモヤした気持ちになる。

「……何をニヤニヤしてるのですか。その調子じゃ大丈夫そうですね」

「ああ。急に食べ過ぎて、体がびっくつしたのかもね

やつ、食べ過ぎた……。

「〇一郎室に招かれた俺は、テーブルに並ぶ数々の皿を前に、立ちすくんでいた。

「あー。おはよー」

「おはようございます」

声をかけてくれた螢火さんは、使った調理器具を洗っていた。

「朝から豪勢ですね」

まさしく『招待された』って感じだ。

「やつぱつ、作り過ぎひやつたかな」

「……何で白鳥さんが答えるんです?」

しかも、彼氏に初めて手料理を振るった女の子みたいなノリで。

「何が? - - あ、螢火ちゃん。わざわざありがとうございます。でもそれも僕の仕事だから - - さ、食べて食べて!」

洗い物の手を止め、螢火さんも席に着いた。

…………。マジか!

「レ白鳥さん作か!」

「これは金を払った方がいいんじゃない? そう思わせるほど出来だった。新手の詐欺だ。美味しい美味しい詐欺。」

まあ、純粋に凄いと思ったし、美味しいとも思って平らげましたけども。

「うわー！」

「いやあ、まさか全部食べてくれるとは。作った甲斐があったよ」と、白鳥さんは満足そうに笑い、後片付けを始めた。

「……螢火さん。それで僕に、何か手伝えることは……」

手伝いといえば、白鳥さんに食器洗いを申し出たところ、

「いいまでが僕の仕事……とにかく、趣味なんだよね。ありがとうございます。気持ちだけ貰つておくれよ」

じつやう料金は取らないみたいだ。よかつた（そりゃそりだ）。

話を戻そう。

「手伝うって言われても……ないわよ。だって、私がやること自体がないもの」

「そりなんですか？」

「別に私は靈媒師とかじゃないし、夜な夜な異能バトルにいそしんでるわけでもないし。歌手を目指してもないし」

「陰ながら応援します」

「だから田舎してないわよ。

それに、あなたの体ことも桃子におまかせー とは言つたけれど

「それこそ言つてないです」

何故か小ボケを挟んでくるなあ。この人、どこまで本気なんだか。

「……言つてないけれど、そう言つたけれど、実のところ私ができることなんて、一つもないのよ。あなたの体の、回復を待つだけ」

「回復を、待つだけ……」

つまり、しばらくなはこの生活が続く。

「…陽生くん。暇なら、ちょっと頼まれちゃってられないかな?」

テーブルを拭きながら、白鳥さんが言った。

「僕でよければ。何ですか?」

「今日の朝ご飯で冷蔵庫の中身フルに使っちゃったから、スーパーに行つて欲しいんだけど」

「そんなに張り切ったんですか……」

「そこはこの人で、そこまで本気じゃなくてもいいだろ?」

「可愛いだろ?」

まあ、どう見てもオッサンなんですね」

「陽生くん。突つ込みは言葉にしなさ……陽生くん。想いは言葉にしなきや、伝わらないんだよ」

それは言い直し詐欺だ……。

「最近、生き生きしてるわね」

螢火さんが言つ。俺にではない。

「やつかい？ まあ冴えない独り身の男に客人が来てくれて舞い上がる気持ち、つてのを察してくれよ」

「白鳥さん独身なんですか？」

「せうだよお。同情するなら嫁をくれつ」

「切実ですね……」

「あ、陽生くんって妹いたじやん」

「……いますけど。いますけど、それがどうかしましたか。白鳥さん」

「『』めんなさい……ほんの出来心です。ですかひひつか、そんな田で見ないでください」

「あ、すみません」

無意識で目つきが悪くなっていたようだ。『気をつけなければ - - 小四のとき、母親から人殺しの目をしていると注意された伝説を持つ、『曰く付きの目』である。

「それにしても、生まれ変わるなら、もっと優しい目の人にになりたかったな」

「 - - あなたのそれは、その体の目なんかじゃないわよ」

俺の何気ない咳きを、螢火さんは否定した - - 若干、語氣を強めて。

「そうなんですか。じゃあ俺の - -

「陽生くん。これだけ買ってきて」

会話を遮るようにして、白鳥さんからメモとお金を渡された。

……やつやと行けってことか。

「じゃあ、いってきます」

……そんなこんなで、俺達は指定されたスーパーへ向かっているところだった。回想がくだらな過ぎて忘れるところだった。危ない。危ない。

ちなみに、今は電源を切つてある携帯を耳に当てているため、外からは普通に通話中に見えるだけ……痛い人対策はバツチリだ。

「さすがキキ殿。回想が長い、と海藻が長い、を掛けてるんですね。  
はつま。上手いですねえ」

「『ビ』で田島さんとのやり取りを聞いていたかは知らないけど……  
てか、何がどう掛かってるの！？ 一度でも海藻の話をしたか！？」

「さつきワカメの味噌汁美味しかったなあ、って」

「言ひたけど、今関係なくないか……」

朝ご飯の場に呼ばれなかつたのがショックなのだろうか。

何で来なかつたのか訊いたら「ちょっと外に出てと言ひたのは、  
キキ殿じゃないですか！」と怒られたので、まあ、責任は俺にある  
と言つていい。

どうせよ、ヒトが食糧とする物を、オニは食べないらしいが。

「じゃあ、普段何食べてるの？」

「いつも言つ、野菜みたいな物を育てて食べているのです

「何か好物とかあるの？」

「魚肉ソーセージです」

「話にならねえ……」

「これでも笑いませんか……」

「笑わせたかつたの？」

なんか、悪いことしちゃつたなあ。

「」いつ見えてもいりり、北風のいりつと呼ばれて久しいのです

それ、駄目な方だからな。

「まあでも、キキ殿ほど笑顔の似合わない男はいませんから、笑わない方がいいです」

「放つといってくれ」

自覚してゐるわ。

「まあまあキキ殿。素顔が似合わないよりかはマシですよ」

「そんな奴いるかつ」

素顔つて……そのままじやないか。

「あー……今まで人前では二口二口烁こよつと心がけてきたけど、それは逆効果だったわけか」

「キキ殿……」

こりりが氣まずそうに視線を逸らして、

「二口動は……」

「その返しあざつなの？ オーとして」

俗世間に漫りすぎだよ……。

「いろいろが馬鹿だってことも十分わかつたし、そろそろ店に着いつ  
か」

尺的にも限界だし。

「ば、馬鹿とは失敬な！ いろいろはただ、この小説の『ムードファ  
クトリー』になりたいだけなのです！」

「ファクトリー！？ 大きく出たなあ

「それに、馬鹿って言つた人が馬鹿なのです。やーい、バーカ！  
バーカ！」

「いろいろの方が言つてるじやん」

「のつ！ 誘導尋問とは卑怯な！ キキ殿のダテン師！」

「いや、それを言つなら……え？ 境天使？ ペテン師？ わかり  
づら」ボケは・・

「螢火？」

「・・はい？」

耳から、暗黒画面の携帯を離す。

いりの声ではない。

自転車に乗った、部活帰り風の女子高生が、そこにはいた。

目が - - 合う。

「……螢火。ねえ、螢火 - - だよね？」

## 第三話（後書き）

話が進まない……。

なんとか投稿できました。

次の投稿は19日を予定しています。

感想、誤字脱字の指摘、待っています。

ありがとうございました。

## 第四話

その視線は、はつきりと俺を捉えている。

「は・・はい」

そう答えてみたはいいが、生憎俺はこの人を知らない。

すると少女は、そんな俺の様子を察したようで、

「ウチ、水谷みずたにだけど、覚えてない？ 去年、転校した……」

言葉が徐々に、小さくなっていく……。

そして、探るような目つき。

「きみ……なまむか匠克たくじゃないの？」

「ナルなら？ いいえ……」

「……だよね。」

すみません。人違いでした。あんまりに知り合いに似てたから

打つて変わつて、丁寧な所作。

水谷さんがおじぎをすると、ふわりとおさげが揺れた。

「いいですよ。よくある」とです

「いえいえ……じゃあ、失礼しました」

言つて、水谷さんは自転車を漕ぎ出していった。

「……なあ。俺、ちゃんと話せてたかな?」

彼女の背中を見送りながら、見えなくなつたところで、俺は訊いた。

「の? ええ、差し支えなく、こなしていましたよ?」

いりは、それが何か? という顔をしている。

「そつか。……ああ。いや、人と会話するの、苦手なんだよ」

「そうなのですか? そんな様子、微塵も感じませんでしたよ」

「そう見えないよう、精一杯やつてるつもりだよ。これで一杯一杯だ」

人と話すのは嫌いではない。あくまで、苦手なだけ。ノウハウがわからないだけ、だ。

こんなでも、とりあえず相手に不快感を与えない程度の受け答えができるまでに、進歩というか挽回というか、したつもりだが。

「人付き合いが不得意ですか? 確かに携帯のアドレス帳の中は、泳げそなうくらい広かつたです」

「か、勝手に覗くな！」

泳げそつなくら』って……大きい風呂見た感想みたいなこと言つてやがつて。

「申し訳ありません。覗いていいのはお風呂だけでした」

「今のうちに用意してくれ」

てか、こりりはステルス性能あるから、それを利用して、色々な悪事が可能じやないか？……まあ、ちよつと頭が残念なこの子に、一体何ができるというのか。

「『キキ殿！ メールを一件受信したのですー。』」

「おおっ、そんなことができるのか」

「『キキ殿！ 朝なのです！ もうっー 起きてくださいよー。』」

「すげえー！ 他にはどんな機能があるんだ？」

「電話とかですかね。ちなみにダウントロードは一つ田田です」

「現金な奴だ……まあ、しょうがないな。アラームのを置つよ」

「ちよつ、置づのですかー……まったく、自分で言つておいてアレですが、妥協しないでくださいよ。お代も結構です。

キキ殿はヒト付き合つが苦手でも、オーフ付き合つは苦手としないのですね」

「いろいろが特別話を合わせてくれるから、やりやすいだけだよ。

「いろいろで、オーハって呼び方、実はあまりよくなかったりするのか？」

「そんなことないと思こますよ。そもそも、いろいろ達自身を表す単語がなにのべ、どう呼ばれても文句は言えませんよ。

キキ殿だって、差別的な意味を孕ませて言つているわけではないのでしよう？」

「まあ、やうだけじ……」

その後も駄弁を弄しながら、田嶋さんのメモを頼りに店に着き、メモを頼りに買い物を終え、帰路の途中でお田嶋での携帯充電器を購入し、現時刻は正午・炎天下の中、ひいひい言いながらの道中である。

「また何やり、考え込んでこりつしゃこますね」

その通りだった。俺の頭は、さつき会った『彼女』のことで一杯だった。

「『恋ですか、それとも鰐ですか？』って言わなくていいよ。違うから」

「の……では、いろいろからぬることは最早何もありません。頑張つてください」

「お前はボケしか言えないのかー？」

勘弁してくれ……。もしかして『ミコニケーション』能力という点のみで見れば、いろり、俺より駄目なんじゃなかろうか。

「狭い町なので、散歩でもしてたら再び会えるのではないか？……次に相見えるときは、お互い敵同士でしょうがね」

「シリアルスっぽい……遠くを見つめる感じとかが、いかにもソレっぽい。」

「……水谷さん、だけ？　が、人違いでしたって謝つてたじやん。でもさ……もしかしたら人違いだったのって、俺の方じやないか？」

螢火、匠克。

ホタルビ、ナルミ。

螢火さんがアルケミストでもネクロマンサーでもないなら、この体をどうやって調達してきたのか……そういうことだったのか。

「この体の宿主とでも言つのか……は、螢火さんの弟とか、それに近い者だらう。」

俺は間借り者の、紛い物だつたらしい。

そして、それはまた一つの疑問を生む。

一難去つて、また一難。

まだまだ、前途は多難。

本題 - - 匠克本人は、どこにいるんだ？

「なあ、いろり」

「…………」

「いろり？ 聞いて - - 」

「キキ殿」

いろりは歩みを止め、振り返った俺をじっと見つめる。

表情が堅い。そして覚悟も堅いのだろう - - いろりは口を開いた。

「いろりが匠克殿と初めて出逢ったのは、つい一年前です。当時、匠克殿は高校一年生でしたね」

高校生になりたての頃。五月あたりだった気がします - - ということは、俺と同じ年らしい。

その経緯は訊かなかつた。いろりも言わなかつたし、別にそこまでの興味も湧かない。

いろりは駆け足で俺を追い抜き、歩きながら話し続ける。

「いろり達は友達になつた。桃子殿とも、匠克殿を通じて知り合いました。勿論、二人は姉弟です。」

そして、匠克殿が『向こう側』に惹かれていくのに、時間はかかるなかつたのです」

文字通りの意味で、入り浸つたといつ。

弟さんのように、偶然オニの存在を知つた人間を裁く法は、向こうにはないらしい。

向こうに迷い込んだ人間にも同様で、追い出されたりもしない - それは単に、ヒトが来たことを観測できないかららしいが。

とにかく、萤火弟さんはオニを知り - - 理解した。

「ネトゲをやり込む感覺でしょうかね。匠克殿は気が付けば、かなりの地位に立っていました。<sup>きゅう</sup>府<sup>くら</sup>を任されるほどでした」

『府』のトップ - - それはもしかしたら、サラクさん、ヤナギさんと肩を並べるレベルかもしねない。

それは異例の出世と言えよつ - - 異例の世に出る。

いや、異世界人がたかだか数ヶ月でそこまでの業績を上げるとなると、最早、異常な出世だ。単純な話、ほつと出の野良犬が、どこの馬の骨が、社長をしているような - - そんな感覺だろう。

「ヒトは、あちらの世界で影響を受ける - - よくも悪くも、です

精神世界、つて奴か。

「匠克殿は、優しい人でした。しかし - - 変わつてしまつた。染ま

つてしまつたのです

闇に浸かれば黒くなるのです・・といふことは続けた。

前を歩く少女の、その表情は見えない。

デフォルトが、逆三角に口を開きっぱなしの言ひてしまえば馬鹿面ないいろづが、どんな顔で、どんな想いで語つてこのか・・想像したくもない。

「匠克殿は、オーネを、生態系の頂点に立たせようとしているのです・・ヒートを、滅ぼそうとしているのです」

「そんなことって……」

「できませぬ」

いりは断言した。

「……まあ、できるんだろうな。昨日実際に歩いてみて、よくわかつたつもつだよ。

でも、じゃあ、何で今まで誰もやろうとしなかったんだ?」

「こりはヒートの感情から生まれるのですよ。ヒートがあつてこの家のオーネです。

ヒートの心は、言葉は、意思は、大きなエネルギーなのです。それをヒートが使わないと、オーネが有効に使わせてもらつてゐるのです。

それに、あちらの世界は平和で上手く回っているので、そもそも人間界に手を出す必要がないのです」

「なるほど。ヒートを失うわけにもいかないってことか。弟さんは、それを知った上でやつてるの？」

「じつでしょ。悪に取り込まれ、悪意を吸収してしまったので… ただ破壊が全てなのだと思います」

成れの果て、負の感情そのものに…成り果てた。

「じゃあ、いのりの『螢火さんの手伝い』って…」

こりは俺に最後まで言わせず、

「……です」

そう言つて、こりはよけやく振り返つた。

「キキ殿。いろいろからもう一つ、頼まれてくれますか？」

「おうとしこる」とはわかる。でも、

「俺に止められるほど、簡単な話じゃないだろ。その計画とやらに賛成にしき、反対にしき、他のオーラ達だって動いてるんだから…」

「…みんなは、匠克殿を殺さうとしているのです」

「……。で、そなる前に弟さんを助け出せ…と」

……難易度高えつて。

「キキ殿。……桃子殿を、世界を、いろいろを助けてください」

萤火さんは、何も手伝うことなんか、ないつて。

あれは嘘だつたのか。

萤火桃子。

俺は彼女の、多くを知らない。眠そうで、だるそうな美人。

俺の……命の恩人。

「……ああ、夏休みの宿題が一つ増えたな」

「の？」

スーパーの袋を持つていない左手で、いろいろの頭を撫でる。

「まあ、前向きに検討してみるよ」

\* \* \* \* \*

「水谷さん……？」

淵森荘に着いた俺は、白鳥さんの料理を味わった後、白鳥さんの畠仕事を手伝つたりして暇を潰していた。

それも一通り終わり、淵森荘に戻らつとしたときだつた。

水谷さんと会つた。

早い再会だつた。

「おやおやへ、あきあ陽生くん、水谷ちゃんと知り合になのかい？」

手が早いねえ、と付け足す白鳥さんの顔は、鬱陶しそうで、にやつこっている。

「陽生つていうんだ？」

水谷さんが午前中での氣まoeだからか、ねずねずと話しかけてきた。

「そつそつ。林陽生つていうんだ。高校一年だから、水谷ちゃんと一緒だよ。ヰキつて呼んどよ」

好感の持てる血口紹介……いやいや、

「なんで白鳥さんが僕の紹介してるんですか。そもそも、どうして水谷さんと知り合になんですか」

「そりゃあ、水谷ちゃんはウチの子だから」

「え」

子供いたの？

「そろそろ引つ越すけどね」

答えたのは水谷さんだ。

……あ、ああ。淵森の住人か。そつちの意味か。

「陽生くん天然な……な、なんでもないよ。だからこいつち見ないで見ただけじゃんか……。」

「あれ？ 大家さん、白鳥つていうの？」

「きみは失礼だな水谷ちゃん。もう、かれこれ一年以上住んでるだ  
らう」「元」

「はいはいお世話になりましたー」

「ええいじでお別れなのかい！？」

白鳥さん不憫過ぎる……頑張れ。

「あ、えーっと……キキ？ だよね。さつきはホント」「めん」

「だから気にしないでって」

「うわあ紳士だ……タメだし、敬語とかいらないよね？ ウチは水  
谷夏希<sup>なつき</sup>。

部屋は一〇五号室だよ」

\* \* \* \* \* . . \* .. \*

場所は変わつて、白鳥さんだ。

「いやいや、絶対ピーラーだつて。キキは味わつたことないから言えるんだよ」

いやあ、なんといつか。

「まあ、水谷さんは体験談だしね。でもおひじ器せ、おひすんだよ？ ヒット数が違うよ」

すっかり打ち解けてしまつた。

特別、趣味が合つたりもしなかつたし、あらゆる意味で毛色の違う俺達だったが、この人の話しやすさに救われていた。

まず女子高生特有の、棘のよつな一面があまり見えない（失礼）。  
……まあ、見せないだけ、だろつけど。それでもいい。

元氣で、やうに自覚はないらしいが、どこかゆつたりとした雰囲気がある - - 第一印象、そんな子だった。

同じ屋根の下で生活するため、また会うことがあるだらうから、まあ、仲良くできるに越したことはない。

そして意外にも俺は一期一会の場を大切にするのか、と我ながら驚いた。

ちなみに今の議論は『おひるどいが痛いか』といつ不毛な争いである。

「せういえば、キキは高校ビリーラーをするの?」

「いや、ここに引っ越してきたわけじゃないからさ。ただの……観光? だから

……でも、この事態が長引けば、それもあるかもしれないな。

……若干期待している自分がいる。

「引っ越ししてきたわけじゃないって、ここアパートだよ? ……はつ、まさか大家さん、そこまでお金に困つてたのか」

「……水谷ちゃん。怒るよ?」

しつこじょうだが、ここは白鳥さんの一〇一号室。

スイカを切り分けながら、白鳥さんは言つた。

「いいかい水谷ちゃん。陽生くんとは昔馴染みつてやつでね。決して僕は彼からお金を貰つていないし、第一に……」

人差し指を立て、よくある(?)お説教のポーズをする白鳥さん。

「……いや、危ないんで包丁置いてくださいつ」

「「めん」「めん。とにかく、僕は失脚負けなんてしてない」

「でも、ここに住んでるのってウチの家族と、キキと、新井さんく  
らいじゃん」

「うわあ……水谷さん、えげつない。

「そつ……そつだけじ、ほり、副業とかあるし」

「煙でしょ？あれえ？でも大家さん一人だから、獨りだから、  
そんなにお金必要ないよねー」

「えつ、そうだよー、そつですけど何か！」

「開き直つちやつたよ……あと水谷さん、その辺にしておいてあげ  
て」

ある意味、壯絶なオヤジ狩りだ。

可哀想に、きっと前髪の下の瞳はウルウルしているのだろう……。

「他にも副業してるし……聞いてよ陽生くん。エロゲの主人公の大  
半は、実は僕なんだよ」

「知らないですよ……てか嘘ですね」

時間を忘れて三人は話しこんでいたため、いつの間にか窓の外が  
暗くなり、その流れで俺達は白鳥さんに夕飯をこゝ馳走になつた。

「あら、私は呼んでくれないのね」

その声は、明らかに寝起きな螢火さんだった。

「ちよつと今できて、呼びに行こうと思つたところだよ。 - - ああ、  
そうだ。この子は水谷ちゃん。一〇五号室の子だよ」

「私は螢火桃子。よろしくねー」

「！」

隣で水谷さんの顔が強張つた気がした。

螢火さんの適当な挨拶に驚いた - - わけではない。彼女を知つて  
いるのだ。

もつとも、知り合いではなく、匠克の姉として - - 知つてているの  
だろう。

水谷さんは動搖している。無理もない。

おそらく、後で螢火さんに『キキは記憶喪失なの?』等々の探し  
を入れるだろうが、それは仕方がない。螢火さんも、いつものよう  
に適当に流すだけだろう。

そんなこと露も知らないといった風で、表面上は楽しく、俺は食  
事を続けた。

\* \* \* \* \*

「キキ殿。行きました」

「…向ひにひこ、か」

食後、部屋に戻ると少女が待っていた。

「弟さんを助けに行くの?」

「いいえ。まだ、そのときではなこのです。

ただ、向ひにひておいたためにも行くべきですか」

慣れたくないけどなあ。

「それにキキ殿。サラク様がお呼びです」

## 第四話（後書き）

「」の話は何を用意しているのか…。

第四話でした。

相変わらずのスローペースで、次話は11月29日の更新を予定しております。

お気に入り登録していただけたと嬉しいです。

ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0199y/>

---

哀闇アーマー

2011年11月20日07時09分発行